異教の地・日本で生きる

創世記１：１、出エジプト記３：１－１４

2012 年 10 月 15 日
佐々木正明

私たちは日本という国に住み、日本文化の中で、日本人の習慣に倣って生きています。日本人の世界観と神観、価値観と人生観は、キリスト教のそれとはまったく違います。そのような中で生きていくとき、様々な問題が起こってきます。

Ⅰ．従来のキリスト教

いままでのキリスト教は、日本の文化や宗教、習慣や風習を敵視してきました。今でも日本の牧師や宣教師の９５％以上は、対決姿勢をとっています。つまり、日本の宗教、文化、習慣などを、総じてキリスト教の敵、福音の妨げと捉えて戦いを挑んで来たのです。その結果、多くの日本人は、たとえキリスト教を良い宗教と考えていても、何か、相容れないものを感じてクリスチャンにはなれないでいるのです。

多くの宣教師、あるいは欧米のキリスト教に教えられた日本人牧師たちも、聖書の読み方を間違ったとしか言いようがありません。彼らは、イスラエル人に対する神の態度、つまり、ご自分以外のものを礼拝する人々を徹底的に厳しく取り扱い、偶像を憎んでやまない神の姿に恐れをなし、その神の態度をそのまま日本という異教社会に適用したのです。

ところがそのような厳しい神の態度は、アブラハムからモーセにいたるまでの 500 年以上の期間、見ることのできないものでした。神が厳しい神となったのは、イスラエルに対しご自分を明確に現し、様々な奇跡をもって、彼らをエジプトの奴隷の境遇から救い出してからのことです。あの厳しい十戒は「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である」という、大前提のもとに与えられたのです。「あなたはわたしの民、わたしはあなたの神」という明確な契約が、すべての民に明らかにされて、初めて、厳しい偶像礼拝の禁止が行われ、異邦人の悪習に染まらないように、彼らとの交わりが規制されたのです。

モーセによってエジプト脱出が行われるまでの神の姿は、非常に寛容で優しく、おおら

かでした。アブラハムには異教の習慣がたくさん残っていました。イサクの嫁は真の神を知らない人々の中で育ちました。ヤコブの嫁のラケルは、わざわざ父親が大切にしていた偶像を盗み出して、ヤコブの故郷に持って来ました。ヤコブがある種の宗教改革をして、すべての偶像を廃棄処分にしたのは、祖父アブラハムに神が現れてくださってから、150年ほども経ってからのことです。

その後にいたっても、ヨセフの奥さんはエジプトの宗教の祭司の娘でした。モーセの奥さんでさえもミデアン人で、こともあろうに異邦の宗教の祭司の娘でした。神は明確な自己啓示、あるいは自己顕示をする前は、非常に忍耐深く寛容で、神を知らない人々に、ゆっくり時間をかけてご自分を知らせて行かれたのです。

Ⅱ．これからのキリスト教

日本はイスラエルではありません。神はまだ、日本人に対して、イスラエル人に対して行われたような自己顕示を行っておられません。イスラエル人に対して行われたような多くの明らかな奇跡を行っておられません。言うならば、いまの日本は、アブラハムからモーセのときに至るまでのヘブル民族のようなものなのです。

日本人は、偶像礼拝の罪だの、何の罪だのと責められる前に、神を明らかに示してもらわなければならないのです。神は、まだご自分のことをあまり良く知らなかったモーセに、ご自分をはっきりと現し、「わたしはあるという神である」と自己紹介してくださいました。創世記の 1 章の物語全体は、神の自己紹介の物語です。日本人はイスラエル人と同じように、まず、神とはだれであるかを教えられなければならないのです。それから神の力、神の救いを体験しなければならないのです。

イスラエル人にとっての罪は、ご自分を現してくださった神、奇跡をもって長期にわたる奴隷状態から救い、必要を備え、敵から守ってくださった神を裏切り、偶像礼拝に陥り、神の律法を破って生きることでした。しかし、日本人のような異邦人にとっての罪は、少しばかり異なっているはずです。契約と律法を持たない日本人は、契約を破棄し、律法を破る罪を犯すことはできないのです。日本人の罪は、パウロが言うように、神を神として認めない罪です。(ローマ 1：19-25)

従って、これからの日本のキリスト教は、日本文化に敵対し、日本の宗教に目くじらを立てるキリスト教ではなく、また、日本人の習慣や風習を「罪、罪」と攻撃するキリスト教ではなく、天地を造り、すべてを支配し、できないことは何もない、愛の神、救いの神、

寛容と忍耐に富む神、良い者にも悪い者にも雨を降らせ、太陽を昇らせて下さる神、鳥を空に飛ばし、花を野に咲かせてくださる神を、教えてあげるキリスト教にならなければいけないのです。

Ⅲ．異なった宗教や宗教行事に対するわたしたちの態度

敵対的キリスト教ではなく、寛容と忍耐を持って、まだ真の神を知らない人たちに真の神を教えて行くことこそ、いま、この異教社会日本に住むわたしたちの責任であり使命です。そうだとすると、対決姿勢をもって、会う人会う人を敵としていくのは愚かなことです。かえって、キリストの福音を知らないとき、聖書がなかったときにも、日本人社会を機能させてきた宗教を尊重する態度が肝要です。

それらの宗教は間違っており、真の神からは程遠いものを礼拝しています。でも、彼らは知らないからそのようにしているのです。（使徒 17：16-34）たしかに知らないことも罪です。しかし知らさなかった罪の責任は、わたしたちの側よりも、２０００年間、福音をきちっと伝えてこなかった、教会の方にあるのです。日本人は知らないながら、良心に従い、宗教を尊び、社会の必要に答えて来たのです。その宗教がなかったら、日本社会はもっともっとひどい状態になっていたはずです。

日本に神道や仏教がなかったら、自分の価値を認め、他人を尊重し、人と人との和を生み出す社会も、形成されなかったことでしょう。自然を大切にする文化も生まれなかったことでしょう。沈思瞑想し自分を見つめ直す心も育まれなかったことでしょう。冠婚葬祭はどうなっていたことでしょう。もちろん、日本は完全なあ社会ではありません。しかし、神道があり仏教があったから、ここまで良くやってくることが出来たのです。

だから、いま、それらの宗教や宗教行事をあしざまに言うのは、良くないことです。ゆっくり落ち着いて、日本人にも「天地をお造りになった神」を教えていくべきです。罪を責める神よりも、救いを準備してくださっている神を伝えていくべきです。そして、彼らが神の救い、神の力、神の愛、神ご自身を体験したとき、すなわち、神がご自分を顕現してくださったときから、この真の神だけを礼拝することを教えていくべきです。日本人の罪は、別の宗教を持っていることではなく、真の神を知らずにいることなのです。

日本では、いろいろな宗教行事が重なることがよくあります。親族たちも集まることでしょう。仏教の行事も、日本人の心の表現として大切にしましょう。そして、いやいやながらではなく、喜んで、積極的にお墓を掃除し、仏壇をきれいにし、御花を飾り、御線香

をあげ、水やご飯を上げましょう。日本人はだれも、死んだ人がそれを喜んだり食べたりするとは考えていません。ただ、尊敬の表現として行っているのです。それを偶像礼拝と恐れるのは、ススキを幽霊だと恐れるようなものです。そして、（ここが大切）そのような場で、真の神を信じている自分の信仰を語り、神について語って行きましょう。

もしも日本の宗教や宗教行事を悪く言い、敵対的態度をとると、日本人の多くは腹を立てます。そのような態度では地域社会では生きて行けなくなるぞと警告されます。いままでのクリスチャンは、それでも尊敬する牧師や宣教師に教えられたまま、（つまり聖書をよく読まないで）すべての宗教や宗教行事を汚らわしいものとして忌み嫌い、避けてきました。その結果、家族の中で厄介者になり、親族の間でのけ者にされ、地域社会の中で物笑いになってきました。

でも、クリスチャンたちはそれを「主のための迫害」と受け取り、甘んじてきただけでなく、かえって、それに「勝利」をしてきました。そして、そのような勝利者が 1 人現れるごとに、「おれはキリスト教信者にはらならいぞ」と固く決心する人、「私の家からは、絶対にクリスチャンは出さないわ」と、ひそかに思い極める人を、100 人ほども作ってきたのです。

今まで日本に福音をきちっと伝えず、真の神を知らせることができなかったのは、日本人の責任ではありません。かえって、語らず、伝えず、教えずにきた教会の責任です。「神様、この人たちに福音を語る機会を与えてください。あなたを紹介するチャンスを与えてください」と祈りながら、必要とあらば進んで、家族親族地域社会の中の宗教行事にかかわって行きましょう。そして友好的な環境のなかで、積極的に天地創造の神、「私はある」とおっしゃる神を語って行きましょう。

日本人がずっと宗教を持ってきたことを、前向きに受け止めましょう。多くの場合は日本人の生真面目な性格を反映し、善良な宗教です。宗教は、罪によって神から追放された人間の内にある、人間の本性、神に似せて造られた霊的性質の表現なのです。人間は人間である以上、必ず何かを礼拝しようとします。礼拝する心こそ、人が神に似せて造られたことの証明です。礼拝したいと望む心は、人間以外の動物にはありません。神に似せて造られてはいないからです。偶像礼拝は罪であっても、礼拝しようという思いは、神に似せて造られた人間の本性が、自然に発揮されていることなのです。それを罪ということはできません。

結び

私たちは対決型、論争型、勝利感をあじわう伝道は、もう止めにしましょう。それは反逆のイスラエル民族に対する、神様の厳しいを教えと導きを、間違って、自分たちに与えられたものだと受け取ってしまった、教会の失敗です。この間違いのために教会は多くの過ちを犯し、人間に対する神様の本来のみ心に反することを行ってきました。優しい父なる神、放蕩息子をただ喜びの涙をもって受け入れる神、良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ雨を降らせてくださる神、迷い出た弱い羊を危険をも冒して探し求め、救い出して下さる神の御性質を、裏切るようなことを行ってきました。

私たち人間に与えられた神様に似た姿、すなわち人間本来の性質は、旧約聖書に見られる罪を厳しく罰する神には似ておらず、優しく互いに睦み合い、助け合い、励まし合い、協力し合い、他人の幸せを願って生きようとする、日本人的な生き方に似ています。もちろんすべての日本人の生き方がそうであるわけではなく、まったく正反対と思える日本人も沢山います。しかし、最大公約数的に見ると、日本人には、世界の中で突出して、そのような生き方を理想とする人たちが多いのです。

罪のために永遠の滅びを定められた人間を、ご自分の痛みをもって救い出そうとされる神様は、福音宣教のためであっても争いを好まれません。あくまでも優しい神様のご性質、愛し、受け入れ、赦し、癒し、交わりを回復しよとされる神様のご性質を、私たちの宣教の性質として保ち続けましょう。異教徒である日本人に取り囲まれていても、ナアマン将軍のような対応もできるのです（Ⅱ列王記５：１５～１９）。またヨナのようにもパウロのようにも行動できるのです（ヨナ１；１～１５、使徒２７：１３～４４）。皆、自分たちの生きている社会の宗教的状況に逆らわずに、争わずに生きようとしていました。そのように生きてこそ、あなたが語る福音は、日本人の心に訴えるのです。